コロナ禍で「英語科教育法 B」において Online を活用した「共同学習」の試み

関　典明

はじめに

2020 年度後期開講にあたり条件付きではあったが 3 年生対象の「英語科教育法 B」を対面授業で実施できると想定しシラバス改訂を行った。蓋を開けてみると科目登録学生 5 名中 4 名が自宅での受講届があり対面授業参加生は 1 名であることが後期開講日に判明した。後期授業では、前期では全く実施できなかった教育実習で必須の板書、発問、指名など授業運営を下支えする基本的指導技術等を、模擬授業を通して学修させる計画であった。

当初の授業計画とは大きく異なる形となったが、前期の課題への取り組みを通して受講生の大半は英文法が弱く、生徒からの質問に対応する説明力にも欠けることが判明していたので「英文法の小ネタ」と題する計 10 回分の課題を毎授業に課すことは変更せずに実施することにした。模擬授業については以下①～⑥のサイクルで実施しながら授業の柱とすることに急遽変更した。

①対面授業参加生 1 名は、授業内で模擬授業を実施・動画撮影を行い、自身の動画視聴を経て自評と筆者の講評を録音した音声ファイルと模擬授業動画を「成城大英語科教育法 B 共有 Google Drive（以下共有 Google Drive)」にアップし自宅受講生はそれらを視聴し、コメントレポートを送信させる。

②自宅受講生は模擬授業を自宅で実施、動画撮影をして自評を加え録音したものを共有 Google Drive にアップして筆者を含め全員が視聴する。

③次週の授業では筆者と対面授業参加生は自宅受講生から提出された模擬授業動画、自評を 2 人で視聴し、模擬授業へのフィードバック対談を録音し音声ファイルを共有 Google Drive にアップする。

④自宅受講生は、③のフィードバック対談を聴き各自「模擬授業の振り返りレポート」を作成し提出する。提出されたレポートは全員が読み共有する。

⑤次週の授業では、対面授業参加生は自宅受講生から提出された「模擬授業の振り返りレポート」を筆者と読み、模擬授業の改善すべき点について自宅受講生の模擬授業を再度視聴し新たな気づきを焦点とした筆者と協議対談の音声アフィルを共有 Google Drive にアップする。

⑥⑤までの過程を踏まえて、対面授業参加生と自宅受講生は、次の模擬授業課題に取り組み新たな動画撮影・提出を行う。

対面授業参加生は、以上のサイクルを洩れなく実行していることは教室にいるので確認できる。一方、自宅受講生は、他の学生の動画やフィードバック対談視聴をあまり熱心にしておらず、模擬授業では同種の「誤り」が繰り返され、分量指定がなければレポート内容も乏しく提出締め切り日を遵守しているだけで「学びの深まり・広がり」が停滞していると推測された。対面授業参加生との「差」が開くのみならず教育実習を

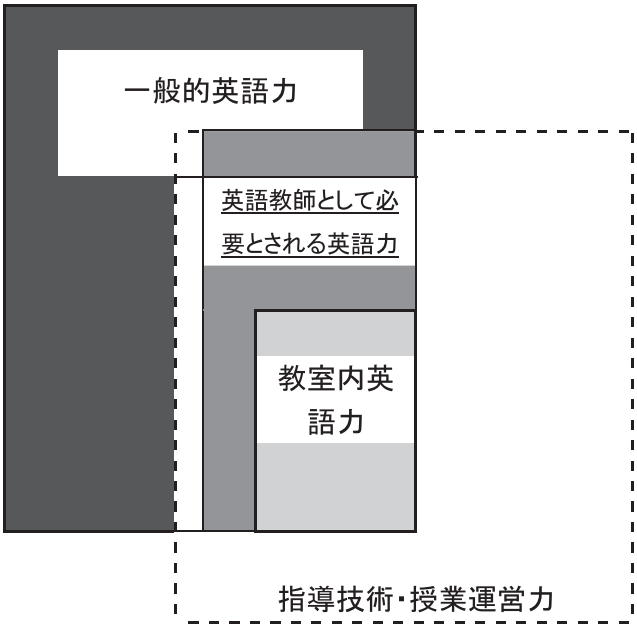
控えた教職課程履修 3 年生として自ら選択した学びに責任を持たせ英語学習指導の基礎・基本の学修をさせる方策の考案と実行が求められると痛感した。

本小論は、今年度後期に教育実習を体験した「英語科教育実習」4 年生と Online 上で意図的な「共同学習」を行い、「英語科教育法 B」受講 3 年生が教育実習に備えて授業課題に主体的に取組むように動機付けて「学びの変容」を生んだ授業記録と考察である。

教室内英語力についての CAN-DO 調査の実施

図 1. は「英語で英語の授業を進める」教員が備えるべき様々な英語力の集合関係を示したものである。中学・高校のいずれの学年を指導するかによって、必要な英語力は異なる。また仮に一般的英語力があっても授業の中で発揮されなければ授業を円滑に進めることはできない。模擬授業などの訓練により他の英語力が活性化される必要がある。

図 1.　教室内英語力と他の英語力との関係（池野修他：2019）



中学・高校の英語教員の備えておくべき「一般的英語力」の数値は、文部科学省が平成 15（2003）年 3 月「『英語が使える日本人』育成のための行動計画」で示した「英検準 1 級取得、TOFL550 点、TOEIC730 点程度以上」が参考になる。

令和元年の文部科学省「英語教育実施状況調査」概略では上記数値は、【CEFR B2 レベル以上】と言い換えられ達成率は公立中学校教員 38.1% 公立高校教員 72.0% と前年よりも向上していると報告されている。図 1 は、一般的英語力があれば、英語で授業を円滑に進めることができることを保証するものではなく、それ以外に「教室内英語力」が内包・活用される必要があることを示唆している。一方、「教室内英語力」だけ

を抽出し徹底的に訓練・習得させても、一般的英語力が絶対的に不足していれば、教材の単語・英文を不正確に発音したり、英文の意味解釈を誤ってしてしまい、早晩生徒の信頼を失うことになるだろう。今年度に教育実習を行った4年生を授業を英語・日本語のいずれで授業を進めたかにより2グループに分け個別に番号・記号（E/J）をつけ、英検取得級、TOEIC点数、（実習校）の順で示す。（受講生10名中1名は本稿執筆中教育実習期間であったので除外した）

（1）授業を英語で進めた（E）

S4E-1：英検2級 TOEIC 690点（高）＊英語は授業全体の65%（約35分間）

S4E-2：英検2級 TOEIC 650点（高）＊英語は授業全体の50%（約25分間）

S4E-3：英検2級 TOEIC 記入なし（高）＊英語は授業全体の70%（約30分間）

S4E-4：英検2級 TOEIC 710点（高）＊英語は授業全体の60%（約30分間）

（2）授業を日本語で進めた（J）

S4J-1：英検2級　TOEIC 記入なし（中・高）

S4J-2：記入なし（高）

S4J-3: 英検2級 TOEIC700点　（中・高）

S4J-4：英検記入なし TOEIC 600点　（中）

S4J-5：記入なし（高）

3年生5名を同様に英検取得級、TOEIC点数、（実習予定校）で示す。

S3-1: 英検準1級 TOEIC880点（高）

S3-2: 英検2級 TOEIC630点（中）

S3-3：英検2級 TOEIC600点（高）

S3-4: 英検2級 TOEIC485点（中）

S3-5: 英検2級 TOEIC590点 IELTS5.5（高）

3年生の受講生の一般的英語力が実習生として十分であるとは言い難い。外部試験の合格や得点向上だけが英語学習の目的とはならないように留意し、3年次までに「CEFR B2レベル相当の教室内英語力を育成できる選択英語授業」が用意され、英語の教育実習を行う学生は必修とすべきであろう。学園の中高も全国の公立中高もCEFRによるCAN-DOリストが学習指導の指標となりつつある。高大接続の観点からも大学の英語科目のシラバス・レベルがCEFRのCAN-DOリストで統一記述されることは、教職課程履修者だけでなく全学生を自律した英語学習者とするために今後は必須となろう。英検HPには、各級の目安として英検2級＝高校卒業程度、英検準1級＝大学中級程度とされている。学園高校では、高校2年生修了時に全員が英検2級取得を必達目標としており、今年度は中学2年生で英検準1級を取得している生徒も在籍し、高校では1年～3年に23名英検準1級取得者がいる。英検2級のCEFR B1レベルで一般的英語力が停滞している学生が教育実習で高校の教壇に立つのは、「“高校生”が高校生に英語の授業をする図式」を連想させてしまう。

CEFR　B1 仕事、学校、娯楽などで普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば、主要な点を理解できる。 その言葉が話されている地域にいるときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。身近な話題や個人的に関心のある話題について、筋の通った簡単な文章を作ることができる。

CEFR　B2 自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的な話題でも具体的な話題でも、複雑な文章の主要な内容を理解できる。母語話者とはお互いに緊張しないで普通にやり取りができるくらい流暢かつ自然である。幅広い話題について、明確で詳細な文章を作ることができる。

ブリティシュ・カウンシル HP より

新学習指導要領によれば中学校・高校共に「授業は英語で行うことを基本とする」とされている（現行学習指導要領では高等学校のみ明示)。 前出の令和元年の文部科学省「英語教育実施状況調査」概略によれば授業中に「発話をおおむね英語で行っている」または「発話の半分以上を英語で行っている」と回答した英語担当教師の割合は、中学校では 76.9%（前年比 2.4 ポイントアップ）高校では、52.4%（前年比 1.9 ポイントアップ）というのが学校現場の現状である。この割合は毎年徐々に増加すると思われるが、教職課程履修学生が中学・高校生在学中の英語の授業は英語では行われておらず「モデルとなる授業」体験がないという現実的な問題がある。

今年度 10 月に 3 週間、母校の県立高校で教育実習を行った学生は、「自分が高校生の時は、授業は日本語が中心で、新出単語やテキストのリスニング、一文ずつ和訳、問題を解くというものだったが、実習では授業は英語と日本語が半々、デジタル化が進み、ペアワークによるアクティビティなどかなり取り入れられて驚いた」と報告している。

しかし、中高でそうした英語の授業を体験したことがない大学生に英語で行われる中高の英語のモデル授業の映像資料を視聴させると教師が話す英語を理解できない場面がよくあった。大学生である自分が理解できないのだから授業を受けている中・高生も理解できないと結論づけてそうした授業を否定的にとらえ、日本語での説明が日本人なのだから必要不可欠であると主張する学生がこれまで毎年少なからずいた。

授業のどのような場面で英語が教師から発話されるかを山森（2013）は、4 つの機能グループと具体的な 24 の使用区分とを ”Framework for Observing and Reflecting Classroom English（ 以下 FORCE）にまとめ、英語を使うことができるかを 5 段階（5 かなりできる：4 ある程度できる：3 どちらともいえない：2 あまりできない：1 まったくできない）で学生に回答させて結果を集計している。

対面ではアンケートを実施できないため山森（2013）の使用区分の文章に筆者が文を補足、必要に応じて具体例を加えたアンケート（表 3）を実施、学生を以下 3 つのグループに分け回答を集計した。

(1) 3 年生 5 名　(2020 年 11 月 10 日実施)

(2) 4 年生 5 名（授業を日本語で進める教壇実習を行った）(同上)

(3) 4 年生 4 名（授業を英語で進める教壇実習を行った）(同上)

表 1. は、上記 3 グループの学生が『今の自分の「英語力」をどうとらえているか』の回答を比較したものである。教育実習中英語で授業を進める体験がなかった（2）の 4 年生の英語力に対する自信の在り様は

実習未経験の3年生とあまりかわらなかった。(3) の4年生で「2」(あまりできない) をつけた項目がある2名にその理由を後日、個別に尋ね以下の回答を得た。実習期間での「失敗」を「自信回復」するには実習期間は短すぎたと言えるだろう。

・私は発音に自信がなく、ネイティブのようなきれいで流暢な発音をすることが苦手です。
私なりには特に日本語にはない発音 (th, r など) を意識して発音していますが、やはり CD のようにきれいな発音はできないので、「2. のあまりできない」を選びました。CD のような英語ではありませんが、ネイティブの人に伝わる英語ではあると思うので、会話は成り立つ程度だと思っています。(S4E-2)
・本文を説明している際、単語のイントネーションを間違えてしまったり、日本人英語になっていることを指摘されたからです。また、あらかじめ考えていた説明は、うまくまとめられた内容構成で説明することができましたが、とっさに物事をうまく説明するということができませんでした。(S4E-4)

表 1. で全グループの学生が最も自信を持てない項目は、12 番「教科書の文章・絵に暗示されている内容・事柄を考えさせる発問を易から難へ段階的にすることができる」であった。11 番「教科書の文章・絵に直接的、明示的に示されている内容・事柄」と対照的である。明らかな正解がある Display Question は学習者として体験はあるが推論から答を導き出す Referential Question は授業で受けた体験がほぼないため教材研究の発問作成段階、指導案作成時に躓くのである。実習前の英語科教育法の授業では、こうした類の発問作成練習に時間を割き模擬授業でやり取りの体験を行うべきであろう。

表 2. は、「英語で進める授業で求められる英語力」の必要性を 4 年生が教育実習を通してどうとらえたかを 5 段階 (5 かなり必要：4 ある程度必要：3 どちらともいえない：2 あまり必要でない：1 まったく必要でない) で回答を集約したものである。実習で実際に英語を使って授業を進めることを求められた (3) の学生の方が日本語で授業を進めた (2) の学生より英語力の必要性を痛感したのは当然であり、総じてポイントは高い。前述の自分の英語力を「2」と回答した 2 名は、必要性についてのアンケートでは「5」(かなり必要) と回答していた。

英語力について学生の自省と向上の動機は学生が自分自身を以下の 1) ～ 3) のいずれの立場に置いているかにより回答は大きく異なると予想していた。

1) 生徒に対して授業を実際に行うのは教育実習が最初で最後だと思っている。
2) 教育実習後、教員採用試験を経て次年度から教壇に立ちたいと思っている。
3) 教育実習後、社会人 (大学院) を経て教壇に立つ可能性があると思っている。

実習校の現場が困るのは 1) のグループに属し、一般的英語力が CEFR B1 レベルで停滞し中高では英語で進める英語の授業を受けた経験が無く、実習校では担当する授業を英語で進めることを実習生に求められる場合である。一方、1) のグループに属し、一般的英語力が CEFR B1 レベルで停滞し中高では英語で進める英語の授業を受けた経験が無く、実習校では担当する授業をほぼ日本語で進めることでよしとされた学生の中には、自らを「運が良い」ととらえ、教材研究は、教壇実習の範囲限定とし「教育実習を楽しむ」と豪語した者もいた。実習生が実習期間を楽しむ、思い出作りをしても授業を受ける生徒が「被害者」となってはならない。私見では、一般的英語力を CEFR B1 から B2 レベルへ向上させるには、約 1 年間の徹底的な英語学習が必要である。CEFR B2 の一般的英語力を前提とした「教室内英語力」は、10 分間程度の課題を課した模擬授業を 5 ～ 6 回実践し、他人の模擬授業を 10 回ぐらい視聴し主体的な協議を持つことで、換

言すれば年間「半期分」の授業内で『基礎部分の育成』は可能だと思う。

「教室内英語力」は生徒に英語で指示する練習だけでなく、生徒の反応（英語とは限らない）に応じてどのように interaction を英語で展開するか疑似体験することではじめて学修される。所謂「教室英語表現集」の丸暗記では、教壇では実際には役に立たない。コロナ過で発生した 2020 年度後期の「英語科教育法 B」自宅受講生に対して、自宅で実施した模擬授業に対して筆者が徹底的に分析・指導を行うよりも教育実習を終えたばかりの 4 年生が実体験を伝えつつ模擬授業にコメントをして 3 年生に至らぬ点に気づいてもらう方が、模擬授業改善に取り組む強い動機づけになると思い Online「共同学習」を計画した。

「英語科教育実習」を受講している 4 年生全員に趣旨を授業内で説明して動画視聴とアドバイスをする事を「課題化」し、3 年生にフィードバックを送る。3 年生はそれを読み返信をする「共同学習」を 11 月から開始した。これまで筆者の「英語科教育実習」受講の 4 年生は、自分の教育実習の経験を毎年、『英語科教育実習読本』という小冊子にまとめて次年度の 3 年生に新年度に渡すことをこれまで 10 数年間行ってきた。また 3 年生の教職ガイダンスに代表者が登壇する前に授業内でプレゼンの在り方を含めた実習と予行演習の機会を設けてきた。今年度は、4 年生にとって自分がアドバイスをする 3 年生が文字通り見える、アドバイスをもらった 3 年生から返信があることは「共同・協働」を意識化した取組みとなったと言えよう。

3 年生の模擬授業と Small Talk の実演を 4 年生の協力により充実化する試み

図 2.　3 年生の模擬授業 & Small Talk 実施スケジュールと 4 年生との協力関係

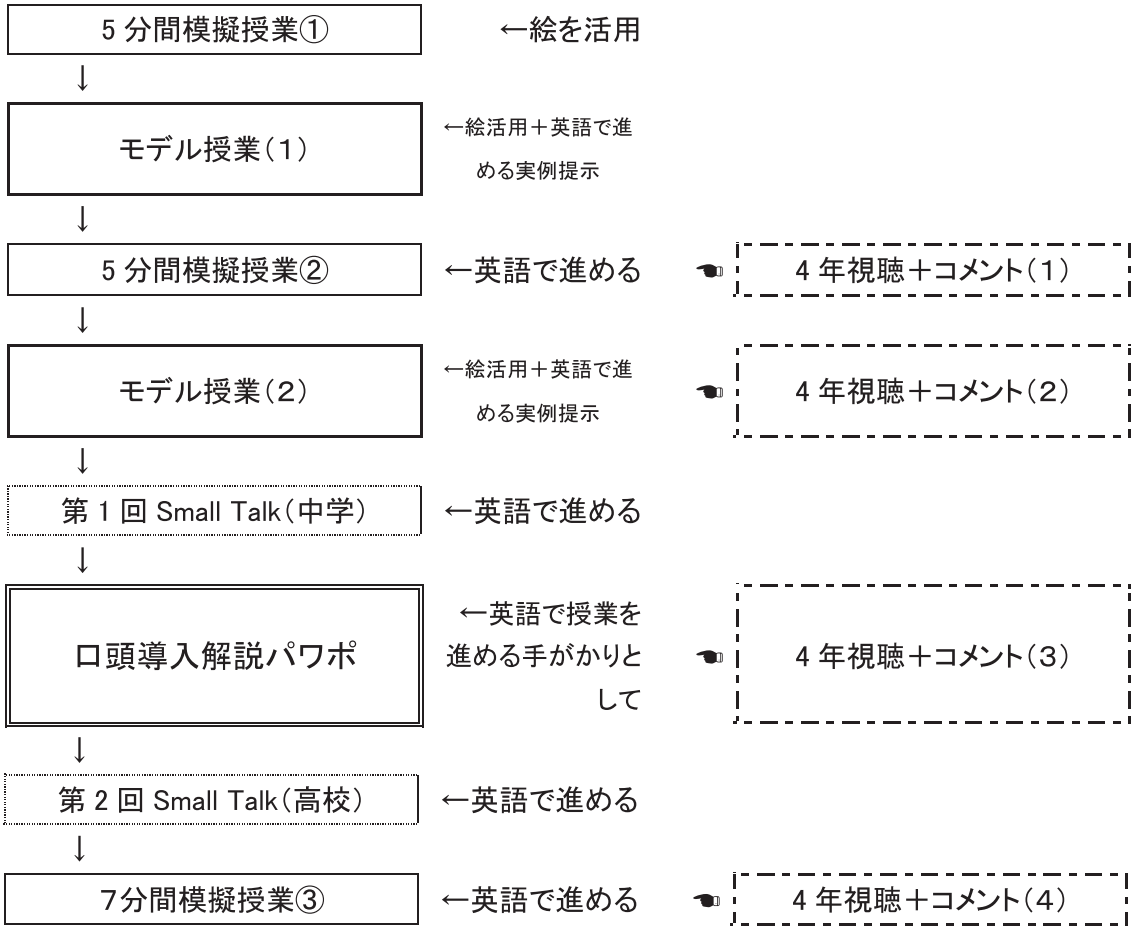


図 2. で 5 分間模擬授業①とモデル授業 (1) を実施した時期は､4 年生の大多数は教育実習で不在であった。5 分間模擬授業②から 4 年生に動画視聴と授業を行った 3 年生へのアドバイスを個別宛に文章とすることを課題とした。集まったアドバイスを 4 年生は共有した上で、3 年生はそのアドバイスを共有 Google Drive で読み 4 年生に返信することを模擬授業準備と並行させた。本稿の提出締め切りの関係で 4 年生の動画視聴とコメントは (1) ～ (3) に限られ 3 年生の反応のまとめと考察も (3) の後までの 2 か月半の期間であった。限定的な回数と機会ではあるが、「共同学習」を経て 3 年生の取組みに第 2 回の Small Talk の実演動画では筆者は指示をしなかったにもかかわらず以下〔1〕～〔3〕の変容が観察された。

〔1〕Small Talk の音読原稿が渡されていたが、本文に入る前に生徒を話に引き付けるための前置きの英文を自分自身で考えて挿入してから展開した。

〔2〕本文で意味理解が難しいと思われる単語について日本語訳ではなく絵・写真を準備し提示しながら話したりその場で略画を描きながら話すことにより英語を理解させようとした。

〔3〕本文で意味理解が難しいと思われる英語について日本語訳ではなくジェスチャーを用いて理解を助けようとした。

第 2 回の Small Talk を変容させるのに影響を与えたと推察される「共同学習」の要因を 3 年生側に立って列挙する。

① 3 年生は 5 分間模擬授業動画②を視聴した 4 年生 7 名から個別に＜コメント（1）＞をもらい、模擬授業に取り組んだ熱意、工夫などが 4 年生に伝わったことを知り励まされた。また模擬授業の同じ場面が、観点により正反対の評価となることも知った。

② 3 年生は、英語で進めるモデル授業（2）を視聴した 4 年生から日本語の説明なしでも絵、ジェスチャーなどを準備・活用すれば、英語で進める英語の授業ができるとの＜コメント（2）＞を読み、そうした英語の授業を実践する方向性を全員が共有することができた。

③ 3 年生は、自分達の模擬授業②とモデル授業（2）と両方を視聴した 4 年生からそれまで 3 年生だけでは気づけなかった模擬授業について細かな指摘を＜コメント（2）＞で具体的に受けた。

④ 3 年生は、自分達も見た「口頭導入の解説パワーポイント・スライド」を見た 4 年生から英語で授業を進めためには、写真・実物を示すことが最重要であるとの指摘がある＜コメント（3）＞をもらった。

まとめ「共同学習」の成果：3 年生の「振り返りレポート」より

4 年生には、それまでの 3 年生個々の振り返りレポートを提示せず、全体的に自省が不十分であることを伝えたうえで実習経験者としてのアドバイスを求め、この形式での「共同学習」が課題の最終段階になることも伝えた。4 年生からのアドバイスは割愛するが、受け取った 3 年生は以下の 2 点に留意して振り返りレポートをまとめるよう指示した。

①これまで自分が「英語で英語の授業を進める」ことに取り組むにあたってあまり考えていなかった視点を 4 年生のアドバイスの中から見つけて、論じなさい。

②自分が「英語で英語の授業を進める」にあたってその実践で乗り越えなければならない「課題」とは何か述べなさい。

S3-1

① S4E2 さんや S4J1 さんがおっしゃっているように、教師が一方的に生徒に何かを教え込むのではなく、生徒に質問を多く投げかけたり発問をしたりするなど、生徒を巻き込んだ授業を行うことは、「英語で英語の授業を進める」上であまり考えてこなかったので、大切にしたい視点だと感じた。生徒が答えられる部分は生徒に発言させる、生徒が日本語で言ってくれたことを教師が英語に置き換えるなどするだけでも、自然に生徒が授業に「参加している」という気持ちになる。実際に自分も模擬授業の中で生徒に問いかけることは意識したが、やはり教師が語る時間が多くなってしまった。自分の模擬授業であれば、“I saw him cross the street.” と “I saw him crossing the street.” の違いを生徒に理解してもらった後、後者の文の場合彼に何が起こったかを考えさせるなど、もう少し工夫することができたと思う。実際の場面で使える英語を教えるという意味でも、生徒になじみのある内容、もしくは想像しやすい内容にすることでより理解が深まるような工夫をすることも必要だと感じた。

また、S4J3 さんや S4J6 さんが指摘するように、教師の質問に対して生徒が答えられない場合、反応が薄い場合があることを想定して、ヒントを用意しておくことも重要なポイントだと感じた。もちろん、生徒が答えられない発問は用意しないことは大前提であり、展開の中で少しずつ発問の難易度を上げていけばそのようなことはあまりないが、生徒が英語では答えづらいようなことは “You can answer in Japanese.” と伝えてあげるだけで生徒は格段に答えやすくなる。また、生徒が言いたそうなことを推測して最初の文字を伝えたり、言いあぐねている様子であれば単語を教えたりすることも教師として必要な技能だと思う。生徒がどのようなことにつまずくのか、どのようなことを英語では言いづらいのかなどを少しずつ把握していき、生徒に何を助言すればいいのか考えられるようにしていきたいと感じた。

②生徒の発言に対して、適切に英語で応答することがまず 1 つの課題であると思う。①で述べたように、生徒が日本語で発言した場合ならそれを英語に置き換える必要があり、生徒が言いあぐねていたらそれに助言をしなければならない。そういった英語を即興で発することが求められるので、普段塾で教えている中でも生徒の疑問に対し英語で答えられるようイメージをしておくことは最低限行っていき、場合によっては英語で説明することも試みてみようと思う。また、生徒は英語を基本的に教師が発する英語からインプットする。だからこそ、S4E3 さんや S4J4 さんが指摘するように、発する英語の正確さ（発音、文法、構文、実際に使える英語かどうかなど）を高めることが喫緊の課題である。キーセンテンスはある程度授業の前に用意をしておくが、それ以外の英語はほぼその場に応じて適宜考える必要がある。そこで発する英語が間違っていては、生徒のモデルとなりえないので、そういった訓練もしていかなければならないと感じた。

S3-2

① S4E-3 からのアドバイスで、自分が手本となるため、しっかり英語を身につけていないと自分が間違えたら生徒も間違えるということが書いてあり、当たり前の事だけれど少し気を抜いていたなと思わされた。初めてのことを教わる生徒側からして教員が教えることが正しいと思っているわけなので気を引き締めたいと思った。

また、S4J-3 の反応が悪いクラスだと想定して用意すべき、というアドバイスはかなり響いた。今まで動画を撮ってきた中の想像だけのクラスは全て反応がいいクラスで、自分が問いかければ正解の答えが返って来て、発言者を募ればみんなが手を挙げてくれるようなクラスを想定していた。しかし自分の経験してきた

授業でも英語の授業は特に恥ずかしがり発言者がいなかったり、シーンとしているクラスもいた。最悪の事態を頭に入れながらやれば、実際反応が悪くても許容範囲内、そして反応が良ければより良い授業を作れると思う。

②上記で書いたように、反応が悪いクラスを想定したいと思う。生徒が飽きないように、授業形態をルーティーン化させないように（S4E-2)、少しのことでも生徒の意見を拾いそれを広げ生徒の発言量を増やせるようにする。五感を上手に使えるように絵や写真、動画を上手く使って飽きない且つ少し緊張感を持つた授業にできたら良いと思う。

　そもそもの自分の能力として、単語量を増やし、英語で英単語を説明できるように英英辞書を活用して知識を増やしていきたい。

S3-3

① S4E-1 の「スライド＋板書は良く定着する」という指摘で、ただ単に画像やイラストで視覚的にとらえるきっかけをつくればいいというわけではなく、その材料はスライド・板書・イラストなど複数の種類を重ねて用いることでより確実に定着することが分かった。S4E-2 の「生徒の発言回数を増やす方法として、教師が投げかけた質問にペアで考えさせ、全体を見て教師が次に進める」という方法を初めて知って、とてもためになった。自分の中で生徒の発言回数を増やすことはとても難しいと感じていて、生徒を指名して発言させることにもあまり積極的になれずにいたが、ペアで話をさせて教師が答えを言って進める方法は生徒にとっても教師にとっても負担が少なく、とても取り入れやすいと感じた。最初に投げかける質問の重要度によって生徒の発表は省いてもいいというのはとても効率的な方法だと思った。どんなことでも小さな質問をすることは可能なので、これを積み重ねて全体の発話量を増やせると思う。S4E-4 に指摘された文の提示と質問の順序は準備段階で考えたものを特に見直さずに動画撮影に臨んだので、自分が説明するのに都合がいい順序ではなく生徒がより理解でき、印象に残る順序を意識するべきだと気付かされた。黒板に書くことを厳選するという点においても、なんとなく書いたほうが分かりやすいかなと思って板書したものもあったので、限られた板書のスペースを有効活用するためにも、もっと考えて書くべきだと思った。S4J-2 の「ボールの現物を持ってきて生徒をひきつける」という発想は考えもしなかったので、とても勉強になった。ストーリーをよりリアルなものにする点でも効果的だと思う。S4J-3 が「新しい刺激を与える」と指摘しているように、典型的な授業形式にとらわれずに映像を用いるなど、もっと柔軟に生徒が楽しめる授業を考える力をつけたほうがいいと思った。S4J-5 の「repeat after me が流れ作業になっている」という指摘は耳が痛かった。実際、つなぎのような感覚でやっていたので反省した。「一回の指示では伝わらない」という現場でしかわからないこともしっかり想定して、どのように自分の支持を伝えるか工夫が必要だと感じた。S4J-6 の「生徒に聞くべきか見るべきか、その場の支持が必要」という指摘を受けて、生徒の視線がバラバラになると、生徒それぞれがその瞬間に興味を持つことや考えることも変わってきてしまうので、それを統一する必要があると分かった。今はなにに集中するべき時なのかわかるように工夫が必要。また、ホワイトボードに書きながら話すという行為について、「生徒のリスニング練習にもなるから特に問題なし」とする人がいる一方、「生徒の反応がわからないから良くない」という意見もあり、難しいなと感じた。ホワイトボードと会話している状態にならないよう、繰り返し言う部分は書きながら言っても良いが、基本は生徒に向かって話すなど明確にわけて、意識的にするべきだと思った。

② S4E-3 が「何よりも英語の力（特に発音）を身に着ける必要がある」と書いていたように、生徒の前に教師として立つ以上、まずは自分の英語力を確実なものにしなくてはいけないと改めて感じた。特に発音に関しては今回の small talk でもその大切さに気が付いたので、教育実習までに英語力は底上げしなければと感じた。生徒の発言回数を増やすという課題についても、ペアで話してもらう、簡単なことでも質問にして投げかけるなど今回知ることのできた方法をもとに改善していきたい。また、板書する内容や指示など今まであまり気を使ってこなかったことも事前にしっかり確認し、より分かりやすく無駄のない授業を心掛ける。

S3-4

① S4E-1 の先輩がアドバイスされていた、「導入のような部分を英語でやる場合は先生がずっと話してしまうような形だと、生徒の興味も引けず英語が分からない生徒は飽きてしまって集中してもらえない。何個も画像を準備してテンポよくスライドや画像を変えていくこと、適宜生徒に質問を投げかけることは本当に大事だと思う。」という部分は、教師が特に注意しなければいけない点であると思いました。教師がいくら英語で説明しても、生徒がそれを完全に理解しているとは限りません。むしろ、生徒は英語の説明をそれほど理解していないと考える方がいいのかもしれません。だからそのためにも、生徒に確認の問題を提供することや、話を聞いてわからなかったことや思ったことを聞くことは、生徒が英語を理解しているかどうかを確認する上でとても大切なやり取りであると改めて思いました。

S4E-3 の先輩の「Reading の指導の時などに音源を手本とし行うならよいですが、自分自身がお手本となる場合は、生徒がそれを手本に繰り返すのですから、間違った発音で言ってしまったら、生徒に間違った発音を教えてしまうことになります。」というアドバイスですが、これについては自分は今までそれほど考えたことがありませんでした。しかし実際に非常に大事なことです。生徒にとって、教師は発音のお手本となります。教師が発音を間違えると、それは生徒に間違いを提供することと同じになります。なぜ、これまで自分の中学・高校の教師が、発音の例を示す教材を使用していたかがわかりました。できれば、そういった視聴覚教材でお手本を示すのが良いのですが、それが可能ではない場合はたくさんあるので、発音にもこれからより注意を払おうと思いました。

S4E-4 の先輩の「慣れていないと黒板に向かって話しているようになってしまいます。最初は意識しないと生徒の方を向いている時間が短くなってしまうと思います。大事なのは生徒の様子を見ながら生徒にきちんと伝えることなので、板書に集中するのではなく生徒に向かって授業をする練習やイメージができたら良いと思います。」というアドバイスは、実際に生徒を前にしたときに確実に課題になると考えられる内容です。伝えることに必死になって、生徒への注意が払えなくなる可能性が高いです。板書と説明は分ける必要があると思いました。

その他の先輩方のアドバイスもたくさん参考にさせていただきました。ありがとうございました。

②私は、自分の「課題」は大きく分けて、ずばり 3 つあると思います。1 つ目は、「発音・イントネーション・声の大きさ・話す速さ」。2 つ目は、「一方通行な説明の禁止」。3 つ目は、「教材を探る」です。この他にも課題はあると思いますが、特に自分はこの 3 つを「課題」にするべきと思いました。1 つ目の課題は、模擬授業を実際にやってみて気づくことができた課題です。一番、自分は注意しなければならないことかもしれません。また、説明を淡々とするだけの一方通行は禁止です。生徒に発言をさせて、グループワークをさせて、生徒に授業を飽きさせないようにさせることが大切です。できる限り楽しい授業にするのが良いはずで

す。そのためにも、視聴覚教材は効果的な方法のひとつであるとこれまでの授業を通して気づきました。また、これからも継続して英語の勉学にまじめに取り組み、授業で使える英語の教材を探してみることも、課題になると思いました。授業で生徒が少しでも興味を持ってくれる教材を見つけて実際にそれを提示できたらいいと思います。教材を今はとにかく探る必要があると思いました。自分が中学・高校で使用していた教材ももう一度、見返します。

S3-5

①４年生のアドバイスの中で、これまで私が「英語で英語の授業を進める」ことに取り組むにあたってあまり考えていなかった視点は「1 度自分に集中させる→説明をする→読む→生徒がリピートをする」（S4J-5）という点であり、特に下線を引いたところがとても気に入っている（気に入っているという表現は少しおかしい気もするが、、）。また、このアドバイスは４年生のアドバイスの中で一番なるほどと感じたところであり、これからの模擬授業・今後の英語の教え方の中で一番気を付けたいところだと感じた。それに加えて、「しっかりと書いてから前を向いて説明に集中する」（S4J-5）という視点も私の中であまり考えていなかったところである。今までの模擬授業では、（時間の制約の中で）説明を急いでしまい、書きながら説明することが多くあった。とても反省すべき点である。また、今回のこの２つの特に気に留めたアドバイスは、どちらも似た内容のアドバイスであり、これからの私の授業に取り入れていく必要があるところなのだと思う。また、それとは別に私がこれまであまり考えていなかった視点は、「説明しながらもできる限り生徒の話す回数を増やして、生徒が集中して授業を受けられる環境を教師が作ってあげなければいけません。」（S4E-2）そのために、「ペアで話す機会を多く作ってあげること。」（S4E-2）という生徒の発話を増やすアドバイスとして実に簡単な方法があげられていたところである。４年生のアドバイスはどれも「なるほど」と思わされるアドバイスばかりで私が押さえておきたいアドバイスはワードでまとめたので、これからの取り組みで生かせるようにする。

②私が「英語で英語の授業を進める」にあたってその実践にあたって乗り越えなければならない「課題」は、一つひとつの単語の発音もそうであるが、それを踏まえた《語句のつながり》と《文章のながれ》を意識した音読である。今までの音読、模擬授業の中であまり意識していなかったところ（とても当たり前のことなのではあるが、、）であるが、今回の音読練習用 CD を聞いての練習を踏まえて私にとって必要な乗り越えなければならない課題であると思う。この課題を乗り越えるためには、授業で扱う教科書の内容であれば、事前に付属の CD を聞いて今回と同様に練習することが効果的であり、それも含む他の人の《授業研究》や《教材研究》に時間をかけることが乗り越える一助となると考える。今まで授業研究や教材研究を怠ったことはないが、改めてその重要性を強く感じるようになった。

前述のように「日本語で授業を進めた」5 名：グループ（2）と「英語で授業を進めた」4 名：グループ（3）とに分けて 3 年生が有益と引用もしくは言及したアドバイスの出所はグループ（2）からは延べ 6、グループ（3）からは延べ 11 あった。さらに（3）の内訳は表 4. となり特定の個人のアドバイスに集中しているわけではない。3 年生には、4 年生のグループ分けについては全く知らせなかったが、図 2. で示したモデル授業は「英語で進める英語の授業」の在り方を提示したものだったので実習でそうした英語で授業を進めることを経験したグループ（3）の 4 年生からのコメントに知らず知らずのうちに「重み」を感じ引用・言及し

たと言えるのではないだろうか。「英語科教育法 B」受講登録の 3 年生 5 名は、自分達が学習者としては体験したことがない「英語で進める英語の授業」をこれから運営・指導する英語科実習生の意識が実習経験者の 4 年生との「共同学習」により芽生えたと言えるだろう。

これらの 3 年生が自らの教育実習を 1) 2) のいずれととらえているかにより今後、各自の英語力伸長と、「教室内英語力」獲得に向けた努力は異なるものなるだろう。

1）生徒に対して授業を実際に行うのは教育実習が最初で最後だと思っている。

2）教育実習後、教員採用試験を経て次年度から教壇に立ちたいと思っている。

1）でありながら 2）であるかのように装い振舞う学生をこれまで多数指導しなくてはならなかった。コロナ禍で疲弊する学校現場では指導甲斐がない、英語の力もない実習生を卒業生であるからというだけで受け入れる余裕はもはやなくなりつつある。学生を陶冶する教職課程の内実が問われることになるだろう。

（2020 年 12 月 15 日）

表 1．　今の自分の「英語力」をどうとらえているか

基本的教育機能	A 正しい英語の構造への気づきの促進					B 授業運営、授業の雰囲気作り					C 英語・英文の内容理解の促進						D 表現内容のふくらまし、構造との関連づけ								総合平均
項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	
S3-1	4	3	3	3	3	4	4	3	3	4	3	2	3	3	4	4	3	4	4	3	4	4	3	3	3.4
S3-2	4	4	4	3	3	2	2	3	3	4	3	2	4	4	3	3	4	4	4	3	3	4	2	2	3.2
S3-3	4	3	4	4	4	3	4	4	4	3	4	3	4	4	3	3	3	4	4	3	3	4	3	3	3.5
S3-4	4	5	4	3	4	4	1	1	4	5	4	3	3	5	4	3	5	4	4	3	1	3	2	2	3.4
S3-5	4	3	3	4	4	4	3	3	3	4	4	3	3	4	4	3	4	4	4	4	4	3	3	3	3.5
M	4.0	3.6	3.6	3.4	3.6	3.4	2.8	2.8	3.4	4.0	3.6	2.6	3.4	4.0	3.6	3.2	3.8	4.0	4.0	3.2	3.0	3.6	2.6	2.6	3.4
SD	0.0	0.8	0.5	0.5	0.5	0.8	1.2	1.0	0.5	0.6	0.5	0.5	0.5	0.6	0.5	0.4	0.7	0.0	0.0	0.4	1.1	0.5	0.5	0.5	0.5
S4J-1	2	2	3	2	2	3	2	2	2	3	3	2	2	2	2	4	3	3	3	3	3	3	2	2	2.5
S4J-2	5	3	5	3	4	5	3	4	3	5	5	4	4	5	5	4	5	5	3	4	5	5	4	4	4.3
S4J-3	4	3	3	3	3	2	4	2	2	4	2	2	2	4	3	3	2	4	4	4	4	4	4	4	3.2
S4J-4	4	2	4	3	4	4	3	3	2	4	4	4	2	5	5	5	3	5	5	4	5	5	2	5	3.8
S4J-5	4	4	4	2	4	4	4	3	2	3	4	3	4	4	3	3	4	4	4	4	3	2	2	2	3.3
M	3.8	2.8	3.8	2.6	3.4	3.6	3.2	2.8	2.2	3.8	3.6	3.0	2.8	4.0	3.6	3.8	3.4	4.2	3.8	3.8	4.0	3.8	2.8	3.4	3.4
SD	1.0	0.7	0.7	0.5	0.8	1.0	0.7	0.7	0.4	0.7	1.0	0.9	1.0	1.1	1.2	0.7	1.0	0.7	0.7	0.4	0.9	1.2	1.0	1.2	0.9
S4E-1	4	4	3	3	4	3	3	4	4	3	4	3	4	4	4	4	3	3	4	3	4	3	4	4	3.6
S4E-2	2	3	2	4	5	4	3	3	3	4	3	3	4	4	4	4	3	4	4	3	4	4	4	4	3.5
S4E-3	4	4	3	3	4	4	3	4	4	2	2	2	3	4	3	3	4	5	5	3	3	4	4	3	3.5
S4E-4	3	4	2	2	4	4	2	4	3	3	4	1	3	5	4	4	5	4	4	3	4	4	2	3	3.4
M	3.3	3.8	2.5	3.0	4.3	3.8	2.8	3.8	3.5	3.0	3.3	2.3	3.5	4.3	3.8	3.8	3.8	4.0	4.3	3.0	3.8	3.8	3.5	3.5	3.5
SD	0.8	0.4	0.5	0.7	0.4	0.4	0.4	0.4	0.5	0.7	0.8	0.8	0.5	0.4	0.4	0.4	0.8	0.7	0.4	0.0	0.4	0.4	0.9	0.5	0.5

5：かなりできる　4：ある程度できる　3：どちらともいえない　2：あまりできない　1：まったくできない

表 2．教育実習を通して感じた「英語力」の必要性

基本的教育機能	A 正しい英語の構造への気づきの促進					B 授業運営、授業の雰囲気作り					C 英語・英文の内容理解の促進						D 表現内容のふくらまし、構造との関連づけ								総合平均
項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	
S4J-1	5	5	5	4	5	5	5	4	5	5	4	5	4	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4.8
S4J-2	3	5	4	3	5	5	3	4	4	4	5	4	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4.5
S4J-3	4	4	5	4	3	3	3	5	5	5	5	4	4	4	5	5	4	3	3	4	4	4	4	4	4.1
S4J-4	2	5	2	5	5	4	5	5	5	5	5	5	3	4	3	5	2	3	3	5	3	3	5	5	4.0
S4J-5	5	4	5		5	4	4	5	5	5	4	4	4	4	4	3	4	4	4	4	4	4	4	4	4.2
M	3.8	4.6	4.2	4.0	4.6	4.2	4.0	4.6	4.8	4.8	4.6	4.4	4.0	4.0	4.4	4.6	4.0	4.0	4.0	4.6	4.2	4.2	4.6	4.6	4.3
SD	1.2	0.5	1.2	0.7	0.8	0.7	0.9	0.5	0.4	0.4	0.5	0.5	0.6	0.0	0.8	0.8	1.1	0.9	0.9	0.5	0.7	0.7	0.5	0.5	0.7
S4E-1	5	5	5	4	5	5	5	4	5	4	5	5	5	5	5	5	5	4	4	5	5	5	5	5	4.8
S4E-2	4	5	4	4	5	5	3	5	5	5	4	4	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	4.7
S4E-3	4	4	4	4	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4.8
S4E-4	5	5	5	5	5	4	4	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	4	4	5	5	5	5	5	4.8
M	4.5	4.8	4.5	4.3	5.0	4.8	4.3	4.5	5.0	4.8	4.8	4.8	5.0	5.0	4.8	4.8	5.0	4.5	4.5	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.8
SD	0.5	0.4	0.5	0.4	0.0	0.4	0.8	0.5	0.0	0.4	0.4	0.4	0.0	0.0	0.4	0.4	0.0	0.5	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3

5：かなり必要　4：ある程度必要　3：どちらともいえない　2：あまり必要ない　1：まったく必要ない

表3．アンケート項目一覧

基本的教育機能	教室英語の使用項目	
A 正しい英語の構造への気づきの促進	1	教科書の新出単語、本文の発音練習のモデルを CD などに頼らず示すことができる
	2	Pattern Practice の cue を適切に提示し反復練習をすることができる
	3	対話文らしく発音・イントネーション等のモデルを CD などに頼らず示すことができる
	4	物事や現象、絵や写真などを理解しやすい内容構成で描写できる
	5	生徒に気づいて欲しい英文の言語的特徴に気付かせるために、声を大きくしたり、強勢を置く「やや誇張した教育的提示」をすることができる
B 授業運営、授業の雰囲気作り	6	生徒の様子を観察しながら、確認の言葉かけなどをすることができる（例：Are you ready? Are you with me?）
	7	始業とともに、挨拶、天候や日付・曜日、出席確認を行い、直後に 1 ～ 2 分の Small Talk をすることができる
	8	授業の展開や配付した worksheet について活動の意図や目的などを簡潔に説明することができる
	9	授業運営上必要な指示・命令を（Simple/Short/Clear に）与えることができる
	10	授業内の生徒の反応（Q&A, 発表時など）に対して適切な評価をすることができる（例：Almost. Try again. Good. Great. など）
C 英語・英文の内容理解の促進	11	教科書の文章・絵に直接的、明示的に示されている内容・事柄について発問をすることができる
	12	教科書の文章・絵に暗示されている内容・事柄を考えさせる発問を易から難へ段階的にすることができる
	13	教科書の文章・絵の内容に関する生徒個人的の意見・感想を問う発問をし、生徒の言いたい事をくみ取り言わせることができる
	14	必要と思われる内容を同じ表現で繰り返し述べることができる
	15	教科書とは別の具体的な例を提示して生徒の理解を深めることができる
	16	教科書と同じ内容を表現をかえながら話し、生徒の理解を促すことができる
D 表現内容のふくらまし、構造との関連づけ	17	生徒の発話に対して身体反応や相槌（例："Uh-huh." "Right." "Oh, are you?" など）によって反応することができる
	18	生徒自身や身近な事柄について答えがほぼ決まっている質問をすることができる（例：What time did you go to bed last night? ）
	19	生徒自身や身近な事柄について答えが複数ある質問をすることができる （例：What did you do last Sunday? ）
	20	生徒が発話が開始できない・継続できない場合に生徒の気持ちをくみ取りながら適切なヒントを与えることができる
	21	生徒の不明瞭な発話を確認して言い直させたり継続させることができる （例：Pardon? Could you say that again? ）
	22	生徒の発話を再度述べて次の発話を促すことができる （例：S1: I watched TV last night. T: Oh, you watched TV last night. What TV program did you watch? ）
	23	生徒が話そうとしている内容をくみ取り、聞き手側に理解できる英語で代弁したり、広げたりすることができる
	24	生徒の発話の「誤り」を判定し、それに対して学習段階と場面に応じて明示的・暗示的に発話修正を促すことができる

表４．　３年生が「言及・引用した」４年生からのアドバイス

グループ	学生番号	言及・引用数
(2) 日本語で 授業	S4J-1	1
	S4J-2	0
	S4J-3	2
	S4J-4	0
	S4J-5	3
小計		6

グループ	学生番号	言及・引用数
(3) 英語で 授業	S4E-1	2
	S4E-2	4
	S4E-3	3
	S4E-4	2
小計		11

【引用・参考】

池野修他（2019）「教室内英語力」評価尺度を活用した英語教師教育～模擬授業における教師英語の省察～　『大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要』Vol.16 p.7

山森直人（2013）「教育実習生の教室英語力の認識に関する事例研究」 Japan Society of English Language Education （Online 入手）

「令和元年度「英語教育実施状況調査」概要」文部科学省 HP
https://www.mext.go.jp/content/20200715-mxt_kyoiku01-000008761_2.pdf

CEFR　B1、B2　CAN-DO　ブリティッシュ・カウンシル HP より
https://www.britishcouncil.jp/programmes/english-education/updates/4skills/about/cefr

英検「各級の目安」　英検 HP より
https://www.eiken.or.jp/eiken/exam/about/